



春秋戦国時代の名臣 (齊の管仲)

12月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2022年12月21日(水)

幽王が犬戎に殺されて、周は都を洛陽に移した。代わって諸侯が勢力を競い合う春秋覇者の時代が始まり、最初に覇者となったのは、齊の桓公である。

齊では、小白派と糾派がどちらを新君に立てるか争っていた。糾派の管仲は、小白を殺そうとして失敗した。即位した齊の桓公(小白)は自分の命を狙った管仲を(塩辛にすると行って)殺そうとした。

だが、管仲の扱いについて、侍従の鮑叔牙が意見を述べ、「我が君は齊君の位につかれましたが、これから先は私どもでは荷が重すぎます。我が君が天下に覇者たらんと望まれるならば、管仲以外に適任者はありません。」

鮑叔牙が出向いて、管仲の手かせ足かせを外し、管仲の身柄を受け取った。そのうえで都に入って、桓公に目通りさせた。

桓公は、管仲を丁重な礼をもって遇し、太夫に任じて政治をゆだねた。

桓公は管仲を幕下に迎えると、鮑叔牙たちも加えて、共に政治の改革に取り組んだ。兵制を整え、経済政策を練り、漁業、製塩業を奨励して、人々の生活を安定させ、有能な人材をどしどし登用した。

桓公の五年、魯を攻略して、勝利をおさめた。

魯の莊公が遂邑の献上を申し出、和議を結びたいと請うてきて、会盟することにした。ところが会盟の席上、魯の將軍曹沫が壇上にかげのぼり、桓公に七首をつきつけ、「奪い取る領土」は返していただきましょう、と迫った。「よし、わかった」と桓公。しかし一旦承諾したものの口惜しくてならない。

そこで、曹沫を殺して、約束を反故にしようと考えた。

だが、宰相の管仲が諫めた。「約束は約束。それを無視して相手を殺すのは、信義に反し、一時の気晴らしです。諸侯の信頼を裏切って、天下から見離される。百害あって一利なしです。」

このいきさつは、諸侯の間で評判になり、誰もが桓公の信義に感じいり、齊と手を結ぶことを願った。こうして、桓公の七年、諸侯は桓公を盟主と仰いで会盟し、桓公はここに初めて春秋の覇者となった。

その後も、齊は諸侯の信頼を重ね、合計九たび諸侯の会盟を成立させて、天下の乱れをはずめた。桓公は、自信を持ち、驕慢となって言った。

「その昔、夏・殷・周の聖王が天命を受けたが、わしにはその資格が十分にある。今、泰山と梁父に登って封禪の祭を執り行おうと思う。」

宰相の管仲がもつてのほかと諫めたが、聞き入れない。

そこで管仲は、遠方から珍獣怪物が集まってからでなければ封禪は出来ないと行って、懸命に説得し、どうやら桓公を思いとどませた。

参考：(司馬遷史記、管晏列伝、徳間書店)